九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アクセント体系の〈計量的非対称性〉をめぐって：中期朝鮮語と朝鮮語大邸方言を対象に

辻野，裕紀
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門・言語教育学講座

https://doi.org/10.15017/7151999

出版情報：言語科学. 49, pp.21-36, 2014-03-31. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

アクセント体系の〈計量的非対称性〉をめぐって

―中期朝鮮語と朝鮮語大邱方言を対象に―

辻野　裕紀（つじの・ゆうき）

1. はじめに

本稿は，中期朝鮮語[1]（以下「中期語」とする）と現代朝鮮語大邱方言[2]（以下「大邱方言」とする）に見られるアクセント体系の〈計量的非対称性〉について論ずるものである．

周知の通り，中期語と大邱方言は共に弁別的なピッチアクセント（distinctive pitch accent）を有する言語であり[3]，各々次のようなアクセント体系をなしている[4]：

【表 1】中期語のアクセント体系と語例（福井玲 1985）[5]

1 モーラ名詞	2 モーラ名詞	3 モーラ名詞
L	LL	LLL
H	H○	H○○
	LH	LH○
		LLH

[1] 本稿では，河野六郎(1955)に従い，1443 年（諺文発明）から 1592 年（壬辰の役）までの朝鮮語を「中期朝鮮語（中期語）」と呼ぶ．이기문(1998;2005)の「後期中世国語」に凡そ相当する．中期語のアクセントについての詳細は，김완진(1973;1989)，門脇誠一(1976)，福井玲(1985,2013)，早田輝洋(1999)，趙義成(2002)などの諸研究を参看されたい．

[2] 大邱方言の言語的特徴については방언연구회(2001)を参照のこと．大邱方言や大邱方言を下位方言とする慶尚道方言のアクセントに関しては，문효근(1962)，服部四郎(1968)，羅聖淑(1974)，大江孝男(1976)，橋本萬太郎(1978)，福井玲(2000)，李連珠(2000)，辻野裕紀(2008,2010b)，쓰지노[辻野裕紀](2010a)など，夙に多くの論攷がある．慶尚道方言は一体にアクセント言語である．韓国の研究者の中には，허웅(1963)など，慶尚道方言や中期語のアクセントを声調と見做す人も多いが，本稿ではアクセントと見做す．その根拠については，辻野裕紀(2008:75)を参照されたい．弁別的なアクセントを有する朝鮮語の方言としては他に，咸鏡道方言，全羅道方言の一部，江原道方言の一部などが知られている．詳しくは亀井孝他編著(1996:7)，早田輝洋(1999)，福井玲(2000,2001)，孫在賢(2007b)などを参照のこと．なお，現代のソウル方言には，弁別的なアクセントは認められない．

[3] ただし「共に弁別的なピッチアクセントを有する」といっても，中期語が 1 つのアクセント句内で「どこで音調が上がるか」が有意義であるのに対し，大邱方言は 1 つのアクセント句内で「どこで音調が下がるか」が有意義であるという点で異なる．前者のタイプの言語としては他に，古典ギリシア語，サンスクリット語，カザン・タタール語，アイヌ語の殆ど全ての方言，日本語奈良田方言など，後者のタイプの言語としては他に，東京方言を始めとする日本語の多くの方言，スラブ諸語，リトアニア語などが知られている．早田輝洋(1999:158)参照．

[4] 以下，本稿におけるハングルのローマ字翻字は，福井玲(2013:11)に依る．//は音素表記であり，音素表記は趙義成・呉文淑(2004)に依る．

[5] 福井玲(1985)の「平」（＝平声）は「L」，「去」（＝去声）は「H」，□は○に改めた．○は任意の音調を表す．中期語では 1 つのアクセント句において，最初の H の後の音調はいわゆる句音調であり（去声不連三などの規則によって自動的に音調が決まる），音韻論的なものではない．音調の表記法は論攷によって区々だが，本稿では以下，一貫してこのように，L で「低調」，H で「高調」，R で「上昇調」，○で「任意の音調」を表すことにする．

1 モーラ名詞	2 モーラ名詞	3 モーラ名詞
koc《花》	mʌzʌm《心》	sonskarak[6]《手の指》
mom《体》	kaci《枝》	mɨcikei《虹》
	narah《国》, torh《石》	mjeɨiri《嫁》, sarʌm《人》
		ka'jami《蟻》

【表 2】大邱方言のアクセント体系と語例(辻野裕紀 2008)

1 音節名詞	2 音節名詞	3 音節名詞
R	H:H	H:HL
H(H)	HH	HHL
H(L)		HLL
	HL	LHL
	LH	LLH

1 音節名詞	2 音節名詞	3 音節名詞
mar《ことば》	saram《人》	kemeri《蛭》
mar《枡》	kurɨm《雲》	'i'jaki《話》
mar《馬》		mjeɨiri《嫁》
	norai《歌》	minari《芹》
	namu《木》	puttumak《竈》

しかし，中期語や大邱方言は，このように，音節数やモーラ数ごとにそれぞれ複数のアクセント型(n 音節(モーラ)の語に対して，中期語ではn+1個，大邱方言ではn+2個の型)が存在しながらも，すべてのアクセント型が同一の比率で生起するわけではない．例えば，中期語の場合，1 モーラ名詞と 2 モーラ名詞には，それぞれ 2 種類(L, H)，3 種類(LL, H○, LH)の型があるが，Ramsey(1991:219)によれば，1 モーラ[7]名詞の 78%が H，2 モーラ名詞の 68%が LH で現れ，L, LL, H○といった型で現れる語は少数派で

[6] なお，sonskarak は HLL というパターンもある．この場合は，所謂「強いアクセント的境界」が sons と karak の間にあるものとし，アクセント上 2 単位形と考えなければならない．趙義成(2002:60)参照．こうした合成語のアクセントの問題については，김성규(1999)も参照．

[7] Ramsey(1991)は，mora ではなく，syllable という用語を用いているが，torh《石》，mar《ことば》のような 1 音節上声(R)の語を LH として扱うなど，syllable を事実上「モーラ」の意味で用いているので，「モーラ」としておく．なお，大邱方言に現れる上声由来の長母音については，本稿では韻律的特徴と見做し(この点で大邱方言は中期語に比べて「語声調的」と言える)，「モーラ」という単位は設定しないことにする．kaimi(＜M.K. ka'jami)《蟻》，maimi(＜M.K. mʌi'jami)《蝉》のような語に関しては，基底形においては 3 音節語で，母音連続の縮約が生じて 2 音節で実現するものとして，便宜上 3 音節語として扱う．慶尚道方言の長母音について，このような扱いをしている先行研究には，Hayata(1976)などがあり，本稿でもこれに従ったものである．

ある．また，辻野裕紀(2008)によれば，大邱方言においては，1 音節名詞を除くと[8]，語の長さに関わらず，次末音節（penultimate syllable）にアクセントが置かれる型が最も生起頻度が高く，計量的に他の型との大きな懸隔が認められる[9]．

このように，中期語や大邱方言のアクセント体系は，〈アクセント型の生起頻度〉という計量的な観点から照射すると，極めて非均衡な体系をなしていると言いうる．つまり，中期語や大邱方言は，一般には「多型アクセント[10]」と記述されながらも，計量的な観点から見れば，むしろ「固定アクセント[11]」に近い体系をなしているわけである．そして，辻野裕紀(2008:69)は，このように特定のアクセント型が計量的に突出しているアクセント言語を〈非均衡アクセント〉と呼んでいる[12]．

そこで，本稿では，中期語や大邱方言のこうした特性をアクセント体系の〈計量的非対称性〉と称し，中期語においては H, LH,…が，大邱方言においては H(H), HL, LHL,…がアクセント型の default であるという前提に立脚することとする．そして，default 以外の例外的な型が如何に生じたものであるかという問題を研究の俎上に載せ，先行研究を参看しながら，考察を加えていくことにする．

2. 中期語におけるアクセント体系の計量的非対称性

本章では，中期語のアクセント体系の計量的非対称性について，既存の研覈[13]を引きつつ，名詞の場合と動詞の場合とに分けて見ていくことにする．

2.1. 名詞の場合

前述したように，中期語の名詞は H, LH で現れる比率が最も高い：

【表 3】中期語名詞のアクセント型の所属語彙数および比率（Ramsey 1991）[14]

---

[8] 1 音節名詞の場合は，H(H)で現れる語が最も多い．

[9] 詳細は第 3 章で述べる．

[10] アクセント単位の長さに応じてアクセント素の対立数が増えるアクセント体系を「多型アクセント」と呼ぶ．一方，アクセント単位の長さとは無関係に，一定の対立数しか持たないアクセント体系を「N 型アクセント」と呼ぶ．上野善道(1984:167-168)参照．

[11] どの語（句）においても，ピッチやストレスのパターンがひとつに固定されているものを「固定アクセント（bound accent）」と呼ぶ．斎藤純男(1997:111)参照．服部四郎(1984:156,158)は固定アクセントを「無意味強さアクセント」，「無意味高さアクセント」と呼んでいる．こうしたアクセント体系を有する言語としては，日本語宮崎県都城市方言，チェコ語，ゲール語，フィンランド語，ポーランド語，スワヒリ語，フランス語などが知られている．

[12] 辻野裕紀(2008:70)は，大邱方言のこうした特徴や「大邱方言が単純語の範囲では 5 型アクセント」という点を踏まえ，さらに次のように述べている：「多型アクセント，N 型アクセント，固定アクセントはそれぞれ連続した存在であり，これらのすべての性質を同時に併せ持った大邱方言のアクセント体系は，これら 3 つの体系があたかも截然と区別できるかのように論じてきた従前のアクセント論に大きな疑問を呈するものである．」

[13] 中期語のアクセント体系の計量的非対称性に関わると考えられる先行研究としては，Ramsey(1978;1989), Ramsey(1991), Whitman(1994), Martin(1996), 宮瀬誠(2005)などがある．

[14] Ramsey(1991:219)の表の一部を改変．3 モーラ以上の名詞についてのデータはないが，中期語の場合，3 モーラ以上の長さの語の多くは複合語だと思われるので，計量してもあまり意味がないのかもしれない．中期語では，日本語諸方言や朝鮮語大邱方言と異なり，複合語になっても，各構成要素の音調がそのまま連なるパターンが一般的であった．アクセントの変動が起きるものについては，김성규(1999)を参照．一方で，大邱方言の複合語でも各構成要素の音調がそのまま連なるパターンもあり，辻野裕紀(2008:57-58)ではこうした複合

	1モーラ名詞	2モーラ名詞
L, LL	L(35個, 22%)	LL(46個, 19%)
H, H○	H(127個, 78%)	H○(30個, 13%)
LH	—	LH(160個, 68%)
計	162個, 100%	236個, 100%

Ramsey(1991:219)は，このような計量的な著しい偏りから，朝鮮語祖語(proto-Korean)においては，アクセントは弁別的ではなく，形態素の最後の音節にアクセントが置かれるパターン(oxytonic pattern)が基本形(canonical)であったとしている．そして，末音節にアクセントが置かれるこのパターン以外のものは，音韻変化や複合，借用などによって齎されたという仮説を立てている．

例えば，中期語で無アクセント(atonic)[15]の名詞には，次の如き特徴がある:

①-ŋ で終わる語は，基本的にこの型に属する:

e.g. skweŋ《雉》, stoŋ《糞》, tɨŋ《背中》, k^hoŋ《大豆》, koraŋ《畝間》

②無アクセントの2音節名詞の約30%が「母音が共に弱母音(minimal vowel)」である:

e.g. kʌzʌrh《秋》, kɨtɨi《君》, mʌtʌi《節》, mʌzʌm《心》, pʌrʌm《風》

③無アクセントの2音節名詞の約半数が「CV-C_1VC_2(C_1,C_2は共に有声子音)」という構造をしている[16]:

e.g. *kumɨɣ《穴》, *namʌɣ《木》, *norʌɣ《麓》, *muzɨɣ《大根》

④借用語(なかんずく，中国語からの借用語)が多い:

e.g. pyeŋ《瓶》, pi《碑》, c^haŋ《窓》, c^haŋ《槍》, c^ho《酢》, kaci《茄子》, koc^hjo《唐辛子》, tocʌk《泥棒》, roktu《緑豆》, sjakoŋ《船頭》, cjeksam[17]《チョゴリの一種》, cjuŋsʌiŋ《獣》, p^hjenp^huŋ《屏風》

⑤④以外でもある種の借用語のような語が多くあり，それには文化に固有(culture-bound)の語が含まれる:

e.g. tak[18]《楮》, tot^h《豚》, mʌr[19]《馬》, pʌi《梨》, pat^h[20]《畑》, 'os[21]《漆》, pori《大麦》, $pɨt^h$je[22]《仏陀》,

---

語を〈名詞連続〉と呼んで，アクセント変動が起きる〈名詞結合〉とは峻別すべきとした．

[15] Ramsey(1991)の謂う「無アクセント(atonic)」とは，福井玲(1985)などと同じく，L, LL を指す．無アクセントという術語は研究者によってしばしば指す対象が異なるので注意が必要である．例えば，Hayata(1974)，早田輝洋(1999)は，H, HH, HHL を無アクセントとする(慶尚道方言についても同様)．

[16] この中には，namo《木》，'jezi《狐》，nʌrʌ《津》のような，特殊な曲用をする語が多く含まれるが，これらは実際には CV-CVC という構造で現れることはなく，CV-CVC というのは，再構された形のことである．

[17] 한글학회(1992:5330)によれば，cjeksam は H○というパターンもある．

[18] 古代日本語の taku《楮》も想起されたい．

[19] 満洲語の morin やモンゴル語(ハルハ方言)の морь などを参照．このようなことから，mʌr の祖形を *mVrV(C) (LH)と立てて，中期語以前の段階で apocope が起きたものと考えれば，mʌr が L で現れるのは当然と言える．朝鮮語史における apocope については，宋敏(1999)も参照．

[20] 日本語の hata(＜pata)《畑》も参照．

[21] 《漆》を意味する語は，中期語では現代語と異なり，'oc^h ではなく，'os であり，'os《服》とアクセントによってのみ対立する minimal pair をなす．'os《漆》は，咸鏡道方言において[ok'i]という語形で現れることから，朝鮮語祖語においては，*osk だったのではないかと筆者は考える．これと平行的なものには，zjus《(ユンノリの)ユッ》

pinhje《簪》, sokom《塩》, so'om《綿》

また，前アクセント(protonic)の2音節名詞には次の如き特徴がある:

⑥その多くは「形態的に複雑」である．例えば，

・'jemsjo《山羊》は，語源的には'bearded ox'であり，'jem＋sjo と分析しうる[23].

・'urɣei《雷》は，'ur-《泣く，叫ぶ》が名詞化したものである．

・'aki《赤ん坊》, 'emi《母親》, p^hʌri《蝿》などは，接辞-i がついたものである．

茲で，これらの見解に関して，筆者の私見を述べることにする．

まず，①について，管見の限り，1音節名詞で-ŋ で終わる語に関しては，すべて L で現れ，今のところ例外を見出していない．しかし，L で現れる1音節名詞の大半は，その音節末子音が無声子音であることからすると[24]，これは特異だと言わねばならない[25]. Ramsey(1991)は，この問題について，言語事実を提示しているだけで，語末子音として-ŋ を持っていると，なぜ L で現れるのか，その原因が説明されていないが，これについての解釈としては，次の2つがある:

a. 1音節名詞の音節末の-ŋ は，本来-nkV(V は弱母音)であった(Whitman 1994).

b. 1音節名詞で音節末に-ŋ を持つものは，すべて音節頭に激音か子音群を持っており，この音節頭音と L との間に何らかの相互関係があった(宮瀬誠 2005).

現段階では，いずれも仮説に過ぎず，どちらが妥当なのか結論を下すのは難しいが，a 説に関しては，Ramsey(1991)のように，朝鮮語祖語の2音節名詞の基本形を LH と見做し，中期語以前に語末音節が脱

(咸鏡道方言[juk'i];ソウル方言'juc^h)があり，《炭》を表す現代語(ソウル方言)の suc^h(咸鏡道方言[suk'i])の場合は，中期語でも susk と，語末に k があった．アクセントは異なるが，中期語の p^hʌsk《小豆》(異形態 p^hʌc^hもある)もこれらの例と類似している(咸鏡道方言[p^hεk'i];ソウル方言 p^hat^h)．因みに，咸鏡道方言の名詞には-i が付いたものが多くあり，이토[伊藤英人](2009:7)はかかる-i を「絶対接尾辞」と呼んでいる(ただし，中米インディアンの言語やブラック・カリブ語，グルジア語などの絶対接尾辞とは性質が異なるものである点に注意)．朝鮮語には，咸鏡道方言のみならず，その機能が不明な絶対接尾辞-i が様々な語に現れる．例えば，キリマイ(kirma＜kirʌma, 蒙古詞事)，獅子'irʌr(釈譜六)，マノライ(M.K.manora, 陰徳記)，sirɨi(siru, 交隣須知(京大)三)，noktii(noktu, 済州道方言)，'jaŋ'ai('jaŋha, 済州道方言)，kuksi(kuksu, 慶尚道方言，中央アジア高麗語)，micuk^ho'i(meicuk^hoŋ, 中央アジア高麗語)など，様々な時代の文献，諸方言に現れる．

[22] この語については，Ramsey(1991:221)は次のように述べている: The first syllable is almost surely from some variety of Chinese, but the rest of the word is not so easy to explain. The Korean form was in any case the most probable source of the Japanese word for 'Buddha', *hotoké*.

[23] これについては，Martin et al.(1967:1183)も参照．

[24] 宮瀬誠(2005:6)参照．なお，例外的に音節末子音として有声子音を持つ語には，次のようなものがある: son《客》, kor《ありさま》, mʌr《馬》, sur《酒》, hwar《弓》(宮瀬誠 2005:6)．このうち，hwar 以外はすべてアクセントによってのみ対立する minimal pair が存在する: son(H)《手》, kor(R)《谷;イグサ》, mʌr(H)《藻》, sur(H)《匙》．また，《酒》を表す語には，su'ir, su'ur(いずれも LL)といった語形もあり，sur はこれらが縮約されて生じた語形だと思われる．

[25] -ŋ を持つ形態素がアクセント上特異な振る舞いをする例としては他に，'iŋei《ここに》などが LL で現れる現象を挙げうる(i は単独では H)．福井玲(2003:33)参照．

落したと考えれば，L で現れるのは自然なことと言える．また，驥尾に付して附言するならば，現代のソウル方言などで，逆行同化による任意的な音素交替として，-nkV(C)〜-ŋkV(C)のような交替が起きることからして[26]，*-n＞-ŋ という音韻変化は十分にありうる．

一方，b 説に関しては，「何らかの相互関係」という説明が具体的でなく，また，音節頭に激音や子音群を持つ 1 音節名詞のほとんどが H で現れるという言語事実に鑑みると，音節頭の激音や子音群と L という音調に何らかの関係があるとは考えにくい．さらに，tiŋ《背中》の場合は，音節頭音が平音であり，「音節頭に激音か子音群を持っている」という条件に違背している[27]．

2 音節名詞で-ŋ で終わるものに関しては，慥かに Ramsey(1991)の指摘通り，LL で現れるものの比率が高く，Ramsey(1991:220)が挙げている koraŋ《畝間》以外にも，kitoŋ[28]《柱》，kicaŋ《黍》，sisiŋ《師》，'jencaŋ《道具》，njemt^{h}oŋ《心臓》など，-ŋ で終わる 2 音節名詞の多くが LL で現れる．しかし一方で，kusjoŋ《叱責》などのように R〇で現れるものや，pat^{h}aŋ《素質》などのように LH で現れるものも少なからず存在し，こういったものをどのように説明するかが問題となる[29]．また，1 音節名詞の場合と同様，なぜ語末に-ŋ を持つと LL で現れるのか，その相関性についての説明が必要である．

②に関しては，非常に興味深い指摘である．弱母音にはアクセントが置かれにくいという，一般言語学的な見地からしても，kʌzʌrh《秋》，kitii《君》などといった語が無アクセントで現れるのは自然だと言える．しかし一方で，同一の音的環境でも，kʌrʌm《川》のように LH で現れるものや，kʌnʌrh《陰》，kʌmʌr《日照り》のように，HH で現れるものも見られ，かかる語をいかに扱うかが問題となる．

③に関しては，やはり CV-C_1VC_2（C_1, C_2 は共に有声子音）という音節構造と，LL という音調との関係性が分明ではない．通言語的な観点から見ると，むしろ LH で現れそうな構造である[30]．また，③の条件に該当する語には，②にも多く含まれ（kʌzʌrh《秋》，mʌzʌm《心》など），そういった語は，弱母音の影響なのか音節構造の影響なのか判断がつかない．さらに，CV-C_1VC_2という構造の語には，LH で現れるものも数多見られる[31]．このようなことから，筆者は CV-C_1VC_2 という音節構造で類型化することには問題があると考え

---

[26] e.g. [hangu^{k}]〜[haŋgu^{k}]《韓国》，[jɔngi]〜[jɔŋgi]《煙》．

[27] この点に関しては，宮瀬誠(2005:15)も自覚的であり，仮説として，tiŋ が本来*ptiŋ ないし*stiŋ であった可能性を示唆している．これは，中声として ɨ を持つ 1 音節名詞の多くが初声に激音や子音群を持つこと（e.g. ptit《意》，ptirh《庭》，pskir《鑿》，pskim《隙間》，spir《（動物の）角》など）からしてある程度の説得力があるが，現時点ではこれ以上のことは言えない．方言形として ttiŋ, t^{h}iŋ などといった語形が存在すればそれが傍証となってさらに可能性は高くなるが，管見の限り，見当たらない．

[28] ただし，《柱》を意味する語には，kit（L）もあり，kitoŋ は，kit＋-'oŋ（接尾辞）と分析しうる派生語である．

[29] また，Ramsey(1991:220)が挙げている koraŋ という語は，しばしば古代日本語の kuro《畔》と比較される語であり（河野六郎 1949, 1979:559 参照），むしろ④や⑤で論及されるべき語である可能性もある．

[30] アクセントは一般に音節量の大きい音節に置かれやすい（音節量という概念については窪薗晴夫 1995 を参照されたい）．中期語と同じく昇りアクセント核を有するアイヌ語（北海道方言）では，第 1 音節が開音節の語の多くが第 2 音節にアクセント核が置かれることも併せて思い出されたい（アイヌ語では原則的に第 1 音節の音節構造がアクセントの位置を統べる）．e.g. kamuy《神》，reye《這う》．

[31] e.g. kirim《油》，kjezirh《冬》，njerim《夏》，panʌr《針》，parʌr《海》，pinʌr《鱗》，'onʌr《今日》，mazʌn《40》など．'onʌr は，Ramsey(1991:220)も指摘する如く，「形態的に複雑」という点と関係があるかもしれない．河野六郎(1961, 1979:387)の「'onʌr＜*'onar（'o《この》＋nar《日》）」という説を参照．

る.

④と⑤に関しては，朝鮮語祖語のアクセントを考える上で，重要な視点である[32]. いわゆる伝来字音のアクセントは，中国語中古音の声調と規則的な対応関係があり[33]，pyeng《瓶》，pi《碑》，c^haŋ《窓》などの平声字がLで現れるのは特に問題はないだろう. しかし，注目すべきは，tocʌk《泥棒》，roktu《緑豆》のような，例外的な対応関係を示すものの存在である. 興味深いことに，伊藤英人(1997:337)によれば，「固有語化」したと目される入声字は L で現れる傾向がある. もし Ramsey(1991)が言うように本来は H という音調が default であるならば，「固有語化」した語は，アクセントの面でも固有語本来のアクセントに引きつけられて default と同じ音調で現れても不思議ではないが，そうではなく，マイナーなタイプで出るのが興味深い.

因みに，Ramsey(1991:220-221)には，モンゴル語起源だと考えうる借用語の語例は挙げられていないが，モンゴル語起源の語には default の LH の語が数多含まれる[34].

また，⑤に関しては，その出自がはっきりしないものも含まれ，本当に借用語なのかという問題もある.

⑥は，まず，'jemsjo については，'jem《山羊》も sjo《牛》も共に H であり，それぞれの音調がそのまま連なったものと考えればよい. 'urɣei については，なぜ HH で現れるのか，その原因が分明ではない[35]. また，'aki，'emi，p^hʌri に関しては，p^hʌr は実際に H で現れる用例があり[36]，'ak や'em も，主に'aki や'emi の属格形の語幹として H で現れる用例があるため[37]，これらがすべて HH で現れるのは納得がいく. ただ一方で，HH で現れるものには，kaci《枝》，penkai《雷》，sʌmai《袖》など，単純語だと考えられるものも多く，こういった語の扱いが問題となる.

---

[32] 一般にアクセント研究において，native word と non-native word を峻別しておくことは重要である. 後者の場合は，原語の何らかの特徴が反映されている可能性があるからである.

[33] 中国語中古音の声調と中期語，大邱方言のアクセントの凡その対応関係は次の如くである:

中国語中古音の声調	中期語の声調(アクセント)	現代大邱方言のアクセント
平声	平声	H(L)
上声	上声または去声	R または H(H)
去声		
入声	去声	H(H)

無論，この表の対応関係はどこまでも傾向に過ぎず，実際にはもう少し複雑な様相を呈していることは贅言を要しない. 漢字音(声調)についての詳細は伊藤智ゆき(2007)を参照のこと.

[34] 'aktai《去勢した動物》，'oraŋ《肚帯》，koramʌr《黄褐色の馬》，cjertamʌr《赤馬》，kwekcim《鷹の一種》，nac^hin《雄の鷂》など. 一方，sjoŋkor《隼》のように LL の語もあり，弁別的なアクセントや声調を持たないはずのモンゴル語からの借用語のアクセントがどのように決まったかは興味深い問題である.

[35] 'ur-のアクセントは R(～L)であり，その一方で同じような条件の norɣai《曲》(cf. nor-《演奏する》 R～L)は LH で現れる. また，語幹が L のものに-kai/kei が付いても，LH となるものと H○となるものがある: patkai(LH)《鏝板》，cipkei(LH)《やっとこ》; nʌrkai～nʌrɣai(H○)《翼》.

[36] 『訓民正音解例本』「用字例」.

[37] 'akʌi，'emii. 'aki は呼格形の'aka もある.

2.2. 動詞の場合

動詞(形容詞も含む[38])に関しては，Ramsey(1991)は，単音節語幹用言についてのみ扱っており，これらを活用のパターンの違いによって，次の 8 つのクラス[39]に分類している:

【表 4】Ramsey(1991)による単音節語幹用言のクラス

CLASS	分節音の特徴	語例と音調パターン
Class1	子音語幹(阻害音，-r，-j)	mekta(LH)，mekɨni(LHH)
Class2	onset が激音や子音群など	psɨta(HH)，psɨni(HH)
Class3	母音語幹	poko(LH)，pokena(HLH)，po'a(HH)
Class4	母音語幹	sjeko(LH)，sjekena(LLH)，sje'a(HH)
Class5		tjot^{h}a(RH)，tjohʌnje(RLH)
Class6	coda が流音，鼻音，有声摩擦音など	tepta(RH)，teβɨmjen(LHH)，teβe(LH)
Class7	coda が有声摩擦音，h など	nupkocje(LHH)，nuβɨmje(LLH)，nuβe(LH)
Class8	語幹末が rʌ/rɨ など	hɨrikei(LLH)，hɨrre(LH)

上の表から分かる通り，用言の音調パターンとしては，LH… が最も多く，Class2 以外は活用形のいずれかでLH…というパターンが現れる．また，所属語彙も，常にLH…で現れる[40]Class1 に属するものが最も多い[41]．このように考えると，単音節語幹用言については，LH…というパターンが基本ということになり，H で始まる Class2 は例外的と言いうる．そして，Class2 の語は，音節頭に激音や子音群を持つという分節音の大きな特徴があり，これらは朝鮮語祖語においては 2 音節語幹であった可能性がある．つまり，Class2 は，元来 2 音節語幹用言(LH)であり，第 1 音節の母音(弱母音の ʌ か ɨ)の syncope によって，1 音節語幹(H)となったというわけである[42]．このことを定式化すると，次のようになろう:

---

[38] Ramsey(1991)の用語では'verb'．朝鮮語は，動詞も形容詞も形態論的には概ね同じような振舞い方をし，この点で，日本語やアルタイ諸語と大きく異なる．

[39] このうち，Class3 とClass4 は，후쿠이[福井玲](2006)，福井玲(2013)も指摘する如く，少なくとも中期語に関しては区別をする必要はないと思われる．Ramsey(1991)によれば，Class3 と Class4 の違いは，次のように，先語末語尾-ke-が結合した場合に現れる:

Class3: poto(LH)，pokena(HLH)，po'a(HH)

Class4: sjeko(LH)，sjekena(LLH)，sje'a(HH)

しかし，中期語の文献で，sjekena(LLH)のような実例は確認できず，Class3 と同様，HLH で現れるはずである．후쿠이[福井玲](2006:2)，福井玲(2013:116)によれば，『釈譜詳節』(19:5b)に出る sjekena は，影印本では LLH のように見えるが，実際には HLH だという．茲ではとりあえず Ramsey(1991)の分類をそのまま引用しておく．

[40] ただし，nipɨsiko(LLHH)《お召しになって》のように，「尊敬」を表す先語末語尾-(ʌ/ɨ)si-の前では，LL…となる．

[41] Ramsey(1991:224)の TableⅢによれば，全 472 語のうち 152 語が Class1 なので，Class1 の動詞が全体の約 32.2%を占めるということになる．

[42] この説明は，語頭の激音や子音群の発生の観点から見ても穏当である．例えば，12 世紀の中国資料である『鶏林類事』に現れる「白米曰漢菩薩」(*pʌsʌr＞M.K.psʌr)のような例を参照．(因みにかかる変化によって濃音(喉頭化音)が発生していく過程は，琉球語を髣髴とさせる．cf. 与那国方言 *pitö＞*ptu＞t'u《人》) なお，Ramsey(1991)は syncope で脱落した母音として，minimal vowel，すなわち ʌ と ɨ しか想定していないが，済州

*CVhV-(LH) > C^{h}V-(H)[43]
*CVCV-(LH) > CCV-(H)

以下, Ramsey(1991:230-231)の具体例を挙げておく[44]:

*pɨHɨta(LHH) > p^{h}ɨta(HH)《(花などが)咲く》
*tʌHʌta(LHH) > t^{h}ʌta(HH)《焦げる》
*cʌHʌta(LHH) > c^{h}ʌta(HH)《蹴る》
*kɨHɨta(LHH) > k^{h}ɨta(HH)《大きい》
*sɨtɨta(LHH) > stɨta(HH)《掬う》
*sɨsɨta(LHH) > ssɨta(HH)《書く》
*pɨtɨta(LHH) > ptɨta[45](HH)《(目を)開く》
*pɨsɨta(LHH) > psɨta(HH)《使う》
*pʌcʌta(LHH) > pcʌta(HH)《絞る》

結局, Ramsey(1991)は, このような推論を基に, 中期語の H で始まる変則的なパターンは分節音の変化によって生じたものだと見做し, 朝鮮語祖語の用言語幹においてもやはり弁別的なアクセントは存在しなかったものと結論づけている.

筆者の見解としては, まず, Ramsey(1991)は, Class2 以外で, LH 以外で現れるものについては十分な説明をしておらず, それらについて, どのように考えればよいのかが疑問として残る. 例えば, Class3 の語

道方言の一部の語彙を勘案すると, 福井玲(2003:29)も指摘する如く, 実際にはʌとɨ以外に, iの場合もあったのではないかと考えうる. 정승철(1995)によると, 済州道方言には sitoŋ《糞尿を合わせた肥やし》, sikkuu-《相手の夢を見る》という語があり, これらは各々中期語の stoŋ《糞》, sku-《夢を見る》と関係があろう.

[43] 一方,『鶏林類事』の「乗馬曰轄打」,「大曰黒根」などといった用例から, hVCV-(LH) >ChV-(H)という変遷も可能性として想定しうる.「轄打」,「黒根」は各々中期語の t^{h}ʌ-(< *hʌtʌ-)《乗る》, k^{h}ɨ-(< *hɨkɨ-)《大きい》に繋がる語形だと考えられる.

[44] これらの語例のうち, 激音の例に現れるセグメントの H に関して, Ramsey(1991:230-231)は次のように述べている: In a morphophonemic sense, the aspirates can be considered clusters of C+*h*, in the modern Korean dialects as well as in Middle Korean, and an intervening minimal vowel can thus be postulated for the proto forms. A voiceless fricative **h* may not be reconstructable for Proto-Korean. Nevertheless, it seems clear that the source of aspiration in these clusters had to have been some sort of voiceless velar obstruent. For this reason, the identity of the consonant will be left an open question and Proto-Korean obstruent written with the symbol **H*.

因みに, h の問題に関連して附言するならば, Ramstedt や Poppe のような比較言語学的な立場に立つ研究者は, 朝鮮語の h の起源をアルタイ祖語の*i に先行する*s に求める: e.g. 中期語 hʌrk《土》, エウェンキー語 sirugi, 蒙古語 siruγai, チュバッシュ語 šur. 中期語 hʌi《太陽》, 満洲語 šun, ゴルディ語 siú, エウェンキー語 sigun. (語例は李基文 1983:51-52) h 曲用体言の h(<*k?)の問題とも合わせて興味深い問題である. 語幹末の h については, 菅野裕臣(1990:334-335), 福井玲(2003:31)などを参照.

[45] この語頭の p は, 現代語の puripttita《(目を)剝く》の rip の p に残る.

に先語末語尾(接尾辞)や-takaのような語尾類がつくと，語幹がHになる点[46]などである[47]．先語末語尾には，語末語尾と異なり，自立語起源と考えられるものがあり，こうしたことと関係があるかもしれないが，詳細は今後の課題である．

最後に，名詞の場合も含めて，朝鮮語祖語においては「アクセントは弁別的ではなかった」という結論[48]についてであるが，筆者は，方向性としては妥当だと考える．単なる偶然とは言い得ないアクセント体系の〈計量的非対称性〉がその大きな証左であり，また，分節音の変化によって弁別的なアクセントが生じるという現象は，通言語的に考えても十分にありうることだからである．Ramsey(1991)をはじめ，先行研究における「例外的」なものに対する説明は不十分で，未だ仮説の域を超えるものではないが，朝鮮語祖語でアクセントが弁別的でなかった蓋然性はやはり高いと言わなければならないだろう[49]．向後のさらなる仔細な研究が俟たれる．

3. 大邱方言におけるアクセント体系の計量的非対称性

本章では，大邱方言のアクセント体系の計量的非対称性について論ずる．第 1 章で言及した如く，大邱方言においても，中期語と同様，アクセント型の計量的偏向が顕著である．大邱方言は，次末音節にアクセントが置かれる型(以下〈−2 系列〉と称す)の生起頻度が最も高い[50]:

---

[46] pokena(HLH)，ponʌni(HLH)，potaka(HLH)など．

[47] Ramsey(1991)は，naka-《出ていく》のような複合動詞では第 1 音節が H となることから，これらは元来 H だったとしているが(koh(H)《鼻》+mir(H)《水》→kosmir(HH)《鼻水》と平行的なものと見る)，これは語幹同士が結合したものではなく，-a/e を介したものである可能性があり，こうした例のみを根拠に Class3 の語がもともと H だったとするのは問題がある．

[48] なお，Whitman(1994)は，Ramsey(1991)のデータなどを基にし，2 音節名詞にはアクセントと音節構造・分節音との間に相関関係があまり見出されないことから，朝鮮語祖語の名詞には，動詞と異なり，アクセントによる対立があったに違いないと結論づけている．しかし，単音節名詞とは異なり，2 音節名詞になると，形態的に複雑なものも多く，語源的には合成語と考えられるものも混在している可能性がある．また，本来アクセントは文法(品詞)とは独立したものであり，動詞だけにアクセントがあったというのはやや不自然な感がある．

[49] ただし，「かつて朝鮮語ではアクセントが弁別的でなかった」という結論を受け入れたときに生じる素朴な疑問として，朝鮮漢字音の問題がある．既に述べたように，伝来字音のアクセントは中国語の声調とかなり規則的に対応しており，こうしたことが弁別的なアクセント体系を持たない言語で果たしてありうるのかという問題である．これは漢字音がいつ入ってきたのかという問題と合わせて検討すべき問題であり，多くの困難な問題を孕む．

[50] なお，次末アクセントが default というのは，言語類型論的にも興味深い事実である．何となれば，世界のアクセント言語の中で，次末音節にアクセントが置かれる言語は数が多く，アクセント規則として一般性が高いからである．例えば，ラテン語のアクセントは，基本的に次末音節にあり，次末音節が軽音節でアクセントが起きにくい場合には，前次末音節(antepenultimate syllable)にアクセントが移動する(風間喜代三 1998:61 参照)．このようなアクセント規則を有する言語は，イタリア語やスペイン語，ポルトガル語，ルーマニア語などのいわゆるロマンス諸語(フランス語における大規模な apocope は周知の事実であろう)や，言語接触によってラテン語の影響を受けた英語，ドイツ語，オランダ語などといったゲルマン語派の言語は勿論のこと，ラテン語とは系統的にも歴史的にも全く関係のない言語にも観察されることが知られている．例えば，柴田武(1992:79)によれば，アッサム語，アリュート語(古アジア諸語)，ウイルタ語，イラヌン語(フィリピン諸語)，アイマラ語(アンデス・赤道語族)などでも次末音節にアクセントを置くのが原則である．また，Hayes(1995)によれば，アラビア語(レバノン方言，ベドウィン方言)，ハワイ語，トンガ語，インガ語(ケチュマラ語族)，マム語(ペヌート語族)，マナム語，フィジー語などといった言語がラテン語と類似したアクセント規則を持っている．さらに，窪薗晴夫(2006)によれば，日本語標準語の外来語アクセント規則もこれらの言語のアクセント規則と類似している．辻野裕紀(2008)，쓰지노[辻野裕紀](2010a)も参照．

【表 5】大邱方言名詞のアクセント型の所属語彙数および比率（辻野裕紀 2008）[51]

	1 音節名詞	2 音節名詞	3 音節名詞	4 音節名詞	5 音節名詞
01 系列	105 個 (22.4%)	70 個 (11.4%)	24 個 (5.9%)	—	—
0s 系列	230 個 (49.0%)	104 個 (16.9%)	26 個 (6.4%)	2 個 (1.3%)	2 個 (3.0%)
＋1 系列	134 個 (28.6%)		24 個 (5.9%)	7 個 (4.6%)	1 個 (1.5%)
－2 系列		289 個 (46.9%)	263 個 (64.5%)	126 個 (83.4%)	61 個 (92.4%)
－1 系列		153 個 (24.8%)	71 個 (17.4%)	16 個 (10.6%)	2 個 (3.0%)
計	469 個(100.0%)	616 個(100.0%)	408 個(100.0%)	151 個(100.0%)	66 個(100.0%)

そして，〈－2 系列〉以外の型で現れる語には，分節音や音節構造[52]に特徴があるものが多い[53]．そういった傾向は，中期語のアクセントと規則的な対応関係を見せる固有語では勿論のこと，中期語には存在しなかった外来語（主に英語から入った外来語）でも見られる．そこで，本稿では，紙幅の制限もあり，以下，辻野裕紀(2008,2010b)に基づき，3 音節以上の外来語に関してのみ概観していくことにする[54]．

3.1. 3 音節外来語名詞のアクセントと音節構造および分節音の関係

3 音節外来語名詞（全 156 語）は 70 語（約 44.9%）が LHL で現れ，HLL と LLH で現れる語には[55]，次のような特徴がある．

---

[51] 「01 系列」は R, H:H, H:HL, H:HLL, H:HLLL で現れる系列，「0s 系列」は H(H), HH, HHL, HHLL, HHLLL で現れる系列，「＋1 系列」は H(L), HLL, HLLL, HLLLL で現れる系列，「－2 系列」は HL, LHL, LLHL, LLLHL で現れる系列，「－1 系列」は LH, LLH, LLLH, LLLLH で現れる系列である．「＋」，「－」というのは，柴田武(1992)の「アクセント核の逆算指定」という考え方に倣ったものである．

[52] ここでの「音節構造」とは，開音節か閉音節かという，音節の開/閉を指す．

[53] 音節構造や分節音とアクセントの間に相関関係がある方言は他にも報告されている．例えば，孫在賢(2005:78)によれば，2 型アクセントの務安方言のアクセントは分節音の影響が強く，長母音で始まるものはすべて「H(L)」の系列（H(L), HL(L), HLL(L), HLLL(L),…），平音で始まるものは「H(H)」の系列（H(H)～H(L), HH(L), HHL(L), HHLL(L),…），s, h, 濃音，激音で始まるものは両系列に分かれて現れる．3 型アクセントの光州方言の複合語は，s, h, 濃音，激音で始まるものは「H(H)」の系列（H(H), HH(L), HHL(L), HHLL(L),…），それ以外のものは「L(H)」の系列（L(H), LH(L), LHL(L), LHLL(L),…）で現れる．また，弁別的なアクセントを持つ方言ではないが，ソウル方言については，ㅌ마[野間秀樹](2001)，趙義成・呉文淑(2004)などで音節構造や分節音とピッチパターンの相関関係が指摘されている．ㅌ마[野間秀樹](2001:658-659)によれば，ソウル方言の 2 音節語のピッチパターンは，語頭が激音や濃音の場合は HL パターンとなり，それ以外の場合は LH パターンとなる傾向がある．趙義成・呉文淑(2004:46-47)は，「この分野の研究は十分にされていないため，確かな結論を得るには至っていない」としながらも，「例えば 2 音節の単語を見た場合，第 1 音節の頭子音が激音，濃音，/s, h/であるときは第 1 音節のピッチが高く，それ以外の子音のとき，あるいは第 1 音節が母音・半母音で始まるときは第 1 音節のピッチが低いパターンを示すことが知られている」としている．ソウル方言の高低は弁別的でないため，母語話者自身も音の高低に対する認識が弱く，ピッチパターンを対象化するには困難を伴うが，近年，宇都木昭(2013)などによってその実体が漸次明らかになってきている．朝鮮語音声研究の新たなる胎動だと言えよう．

[54] 固有語や漢字語におけるアクセントと分節音・音節構造との相関関係については，辻野裕紀(2010b)を参照されたい．

[55] 筆者のデータ（辻野裕紀 2008,2010b）では，H:HL, HHL で現れる語はすべて固有語であり，外来語は含まれない．

まず，HLL で現れる外来語は，全 12 語のうち，11 語（約 91.7%）が次末音節が/ɯ/[56]という弱母音で終わる開音節である[57]．これは，弱母音の開音節にはアクセントを起きにくく，アクセントが次末音節から 1 つ前の音節に移動したためだと考えうる．

また，LLH で現れる語には，音節配列に特徴がある．開音節を O，閉音節を C とすると，全 51 語のうち，34 語（約 66.7%）が，OOC という音節配列となっている[58]．これは，HLL で現れる語の「弱」に因るアクセントの移動とは反対に，相対的にアクセントをより起きやすい「強」の閉音節（重音節）にアクセントが移ったものと推測しうる[59]．これは「アクセントは音節量の大きい音節に置かれやすい」という，一般言語学的な知見から照らしてみても，妥当性の高い説明ではないかと考えられる．

一方で，LLH で現れる語のうち，OOC という音節配列になっていないものは，全 51 語のうち，17 語（約 33.3%）あるが，これらのうち，kasorrin《ガソリン》，na'irron《ナイロン》，'isɨrram《イスラム》，c^{h}ok^{h}orris《チョコレート》，k^{h}ɨrraisik《クラシック》，k^{h}ɨrriniŋ《クリーニング》の 6 語は，朝鮮語への受容の過程において，〈l-epenthesis〉とでも称すべき，流音反復（liquid gemination）が生じており，音節末に/r/を持つ閉音節を，Kenstowicz and Sohn(2001)のように，開音節と見做すと，これらも OOC という音節配列の語として扱うことができる．そうすると，LLH で現れる語全体における，OOC という音節配列を有する語の占める割合は，約 78.4%となる．

また，keirirra《ゲリラ》，korirra《ゴリラ》，k^{h}o'arra《コアラ》などは，語末に'-rra'という共通した特徴を持っており，アクセントとの関係性が仄見える[60]．

3.2. 4 音節外来語名詞のアクセントと音節構造および分節音の関係

4 音節外来語名詞（全 101 語）は 77 語（約 76.2%）が LLHL で現れ[61]，それ以外のアクセント型で現れるものには，次のような特徴がある．

まず，LLLH で現れる語の大部分は，音節配列が OOOC となっている．3 音節名詞と同様に，流音反復による閉音節を開音節と見做すと，LLLH で現れる全 15 語のうち，12 語（80.0%）が OOOC という音節

---

[56] 大邱方言においては，非外来語では/ɯ/と/ɔ/の対立がなく，共に[ə]で現れるのが普通だが，外来語ではソウル方言などと同様，/ɯ/と/ɔ/が区別されうる．

[57] keisɨt^{h}ɨ《ゲスト》，kosɨt^{h}ɨ《ゴースト》，teisɨk^{h}ɨ《デスク》，risɨt^{h}ɨ《リスト》，masɨt^{h}e《マスター》，k^{h}osɨt^{h}ɨ《コスト》など．唯一の例外は，meimpesip《メンバーシップ》であるが，これは原語のアクセントの影響が考えられる．

[58] nat^{h}ɨrjum《ナトリウム》，nik^{h}ot^{h}in《ニコチン》，ta'i'er《ダイヤル》，tisɨk^{h}eis《フロッピーディスク》，tica'in《デザイン》，marat^{h}on《マラソン》，mineirar《ミネラル》，k^{h}airemeir《キャラメル》，ha'ik^{h}iŋ《ハイキング》など．

[59] 中には，kaikɨmain《コメディアン》，nat^{h}ɨrjum《ナトリウム》，tisɨk^{h}eis《フロッピーディスク》のように，次末音節が/ɯ/でかつ OOC という音節配列の語もあるが，こういったものは LLH で現れるようである．つまり，「強」にアクセントを置くという規則のほうがより強く効いているということになる．なお，kaikɨmain《コメディアン》は HLL と発音する話者もいるようである．

[60] 大邱方言の外来語のアクセント研究である孫在賢(2007a:227)によれば，「3 音節語で語末音節が/ra/である単語は，音節構造に関係なく，すべて LLH で現われる」という．言語事実に対するこの指摘自体は穏当だと思われるが，語末の/ra/がアクセントに影響を与えているかどうかはまた別箇の問題である．語末の/ra/だけが関係しているのか，あるいはその前の/r/も関係しているのかなど，もう少し語例を増やして検討してみる必要がある．

[61] 4 音節名詞（単純語）は，固有語でも，nerpcektari《腿》を除き，すべて LLHL で現れる．また，nerpcektari も語源的には，√nerp-[廣]＋tek（接辞）＋tari という構造の合成語である（김민수 1997）ことを考慮すると，4 音節固有語単純名詞はほぼすべて LLHL で現れると言ってよい．

配列である[62]. この結果は, 3音節名詞の場合と同じく, アクセントは音節量の大きい音節(重音節)に置かれやすいという通言語的な普遍的傾向に合致する.

次に, HHLL で現れる語は, kʰapʰei'orei《カフェオレ》と kʰonkʰirit̪ʰɨ《コンクリート》の 2 語しかないが, 各々濃音の/γ/[63]と激音の/k/で始まるという分節音の特徴がある.

HLLL で現れる語は, 全7語のうち, 4語(約 57.1%)が ropisitʰe《ロブスター》のように, すべて開音節の語であり, 残りの3語も pʰokʰitainsɨ《フォークダンス》のように, 閉音節が各々1つしかないという, 比較的単純な音節配列をしている.

尤も, HHLL, HLLL で現れる語は語例が少なく, これだけで以って一般化することはできないが, 調査語彙をさらに増やし, こうしたアクセント型で現れる語を分析していくと, 分節音や音節配列のかかる特徴が何らかの意味を持ってくる可能性がある.

3.3. 5 音節外来語名詞のアクセントと音節構造および分節音の関係

5 音節外来語名詞(全 66 語)は 61 語(約 92.4%)が LLLHL で現れ, それ以外の型に属するものは例外的である. LLLHL 以外のアクセント型で現れる語は数が少なく, それだけで何らかの特徴を見出すのは困難であるが, そのうち, LLLLH で現れる語は, 2 語(na'itʰikʰirrep《ナイトクラブ》, 'a'isikʰirim《アイスクリーム》[64])しかなく, 共に OOOOC という音節配列を有している. これは, 3 音節名詞や 4 音節名詞の場合と同様に, アクセントが音節量の大きい音節(重音節)に置かれやすいということに起因するものと考えられる. しかし, OOOOC という音節配列の語すべてが LLLLH で現れるわけではなく, 'a'utʰira'in《アウトライン》などのように, 一部には他の型に属するものも見られ, このことは, LLLLH というアクセント型を認める根拠となる.

3.4. まとめ

以上通観してきたように, 大邱方言のアクセントは, 〈−2 系列〉が default である. そして, それ以外の型で出るものは, 音節構造や分節音から説明しうるものが多い. つまり, 大邱方言の外来語には, 固有語のアクセント規則である「次末音節にアクセントが置かれやすい」というアクセント規則が適用されるのが原則であり, それ以外の型の語の大半は, 「弱音節にはアクセントが置かれにくい」, 「音節量の小さい音節(軽音節)にはアクセントが置かれにくい」, 「音節量の大きい音節(重音節)にはアクセントが置かれやすい」などといった, ある程度通言語的に普遍性のある, いくつかの別の規則によって生ずるわけである.

また, 一方で, 逆に, すべての語のアクセントが音節構造や分節音によって統べられているわけではな

---

[62] reisitʰoraŋ《レストラン》, makineisjum《マグネシウム》, mainericɨm《マンネリズム》, mirrikɨraim《ミリグラム》, pa'i'orrin《バイオリン》, sa'ikʰirriŋ《サイクリング》, 'akʰoti'en《アコーディオン》, 'arruminjum《アルミニウム》, 'ei'ipʰɨren《エプロン》, kʰirrokɨraim《キログラム》, pʰɨra'ipʰain《フライパン》, pʰɨrokɨraim《プログラム》. 例外は, kirisito《キリスト》, 'atʰirri'ei《アトリエ》, 'arkoritɨm《アルゴリズム》の 3 語. ただし, 若年層では, これらも default の LLHL で出るインフォーマントもいる.

[63] 《カフェオレ》は카페오레 kʰapʰei'orei と表記されるが, 実際には[까페오레][k'apʰeore]と発音される.

[64] これらは, 語形成論的には複合語と見做すべきものだが, 外来語の場合は, 各要素が 1 つ 1 つ別々に朝鮮語に入ってきたわけではなく, 全体であたかもひとつの単純語のごとく入ってきたものと考えられるため, 少なくともアクセントを論ずる上では, na'itʰɨ＋kʰirrep, 'a'isɨ＋kʰirim のように分解して複合語として扱う必要はないと思われる.

いという事実も，アクセント体系を考える上で重要である．音節構造や分節音によって説明がつかないものもあるからこそ，大邱方言の名詞のアクセント体系が 5 型アクセント，あるいは多型アクセントと言いうるのであり，もしすべてが説明可能であるのであれば，広義の固定アクセントということになる[65]．したがって，すべての語のアクセントが音節構造や分節音によって説明しうるわけではないということは，共時的に大邱方言が 5 型アクセント，あるいは多型アクセントであることの傍証となる[66]．

4. おわりに

本稿では，アクセント体系の〈計量的非対称性〉という視座から，中期語と大邱方言のアクセントについて論じてきた．従前のアクセント研究にあっては，①「個々の語がどのアクセント型で現れるか」；②「全体でいかなるアクセント体系をなすか」という，この 2 点に主たる関心が向けられ，当該の言語にとってどのアクセント型が最も「普通」なのかという視点はあまりなかった．しかし，本稿で概見したように，既存の多くの論攷が看過してきた，アクセント体系の〈計量的非対称性〉に着目することによって，研究の新たなる方向性の端緒を得ることができる．今後さらに緻密な研究を重ねていくことによって闡明される言語事実は数多いと強く信ずる．

参考文献[67]

정승철(1995)『제주도방언의 통시음운론』, 서울：태학사.

趙義成(2002)「中期朝鮮語アクセント小攷」,『朝鮮語研究』1, 東京：くろしお出版.

趙義成・呉文淑(2004)「朝鮮語」,『言語情報学研究報告 4 通言語音声研究 音声概説・韻律分析』, 東京：東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」.

한글학회(1992)『우리말 큰사전 4 옛말과 이두』, 서울：어문각.

橋本萬太郎(1978)『言語類型地理論』, 東京：弘文堂.

服部四郎(1968)「朝鮮語のアクセント・モーラ・音節」,『ことばの宇宙』3-5, 東京：テック言語教育事業グループ.

服部四郎(1984)『音声学』, 東京：岩波書店.

Hayata, Teruhiro(1974)“Accent in Korean：Synchronic and Diachronic Studies”,『言語研究』66, 東京：日本言語学会.

---

[65] 例えば，ラテン語は固定アクセント（1 型アクセント）の言語だが，決して型が 1 つしかなかったというわけではない．3 音節以上の語においては，後ろから 2 つ目の音節にアクセントが置かれるものと，後ろから 3 つ目の音節にアクセントが置かれるものがあったが，その位置は，先にも触れたように，音節構造によって予測しうるものであった．すなわち，アクセントの位置は次末音節の長短に依拠しており，弁別特徴としてのアクセント（核）はラテン語には認められないということになる．

[66] なお，慶尚道方言に関する先行研究の多くはこうした「裏付け」の作業を怠っているように見えるが，音節構造や分節音といった，分節素音韻論的な考察がなされていなければ，そのアクセント体系の構築過程には欠陥があると言わねばならない．ある一定量の語の音調を調査して，それらのアクセント型の総体をアクセント体系とするだけでは不十分なのである．その傍証として，アクセントと音節構造や分節音との相関についての検討が必ずなされねばならない．

[67] 著者名の ABC 順．日本人名は訓令式，韓国人名は Yale system による．

Hayata, Teruhiro(1976)"On Long Vowels in the Kyengsang Dialects of Korean", 『言語研究』69, 東京:日本言語学会.

早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』, 東京:大修館書店.

Hayes, Bruce(1995) *Metrical Stress Theory :Principles and Case Studies*, Chicago:University of Chicago Press.

허웅(1963)『중세국어연구』, 서울:정음사.

福井玲(1985)「中期朝鮮語のアクセント体系について」, 『東京大学言語学論集'85』, 東京:東京大学文学部言語学研究室.

福井玲(2000)「韓国語諸方言のアクセント体系について」, 福井玲編(2000)所収.

福井玲(2001)「韓国語のアクセント」, 『音声研究』5-1, 東京:日本音声学会.

福井玲(2003)「朝鮮語音韻史の諸問題」, 『音声研究』7-1, 東京:日本音声学会.

후쿠이[福井玲](2006)「중세 한국어의 용언 활용과 성조의 관계」, 규장각 콜로키엄 발표요지.

福井玲(2013)『韓国語音韻史の探究』, 東京:三省堂.

福井玲編(2000)『韓国語アクセント論叢』, 東京:東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設東洋諸民族言語文化部門.

李基文(1983)『韓国語の形成』, 東京:成甲書房.

이기문(1998;2005)『신정판 국어사개설』, 서울:태학사.

伊藤英人(1997)「中期朝鮮語正音表記漢字語及び漢語借用語について —声調を中心に—」, 『日本語と外国語の対照研究Ⅳ 日本語と朝鮮語 下巻 研究論文編』, 東京:くろしお出版.

이토[伊藤英人](2009)「유형론 및 언어접촉의 관점에서 본 한국어와 일본어 —일본어 화자 대상 한국어교육의 입장에서」, 伊藤智ゆき編『朝鮮語史研究』, 東京:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

伊藤智ゆき(2007)『朝鮮漢字音研究 本文篇』, 東京:汲古書院.

李連珠(2000)「大邱方言のアクセント体系 —若年層を中心に—」, 福井玲編(2000)所収.

門脇誠一(1976)「中期朝鮮語における声調交替について」, 『朝鮮学報』79, 天理:朝鮮学会.

亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996)『言語学大辞典 第6巻 術語編』, 東京:三省堂.

菅野裕臣(1990)「朝鮮語 —その系統論以前の諸問題」, 崎山理編『日本語の形成』, 東京:三省堂.

風間喜代三(1998)『ラテン語とギリシア語』, 東京:三省堂.

Kenstowicz, Michael and Sohn, Hyang-Sook(2001)"Accentual Adaptation in North Kyungsang Korean", *A Life in Language*, Cambridge, Mass.:MIT Press.

김민수(1997)『우리말 어원 사전』, 서울:태학사.

김성규(1999)「중세국어 합성어의 성조」, 성백인 교수 정년퇴임 기념논문집 간행위원회편『언어의 역사』, 서울:태학사.

김완진(1973;1989)『중세국어성조의 연구』, 서울:탑출판사.

河野六郎(1949)「日本語と朝鮮語の二三の類似」, 八学会連合編『人文科学の諸問題 —共同研究課題「稲」』, 東京:関書院.

河野六郎(1955)「朝鮮語」, 市河三喜・服部四郎編『世界言語概説 下巻』, 東京:研究社.

河野六郎(1961)「古代朝鮮語に於ける母音間のㄷの変化」,『朝鮮学報』21・22, 天理:朝鮮学会.
河野六郎(1979)『河野六郎著作集 1』, 東京:平凡社.
窪薗晴夫(1995)『語形成と音韻構造』, 東京:くろしお出版.
窪薗晴夫(2006)『アクセントの法則』, 東京:岩波書店.
Martin, Samuel E.(1996) *Consonant lenition in Korean and the Macro-Altaic question*, Honolulu: University of Hawaii Press.
Martin, Samuel E. et al.(1967) *A Korean-English Dictionary*, New Haven: Yale University Press.
宮瀬誠(2005)「朝鮮語祖語の名詞アクセント」, 第 211 回朝鮮語研究会発表要旨.
문효근(1962)「대구방언의 고저・장단」,『인문과학』7, 서울:연세대학교 문과대학.
羅聖淑(1974)「韓国語大邱方言の音韻 —アクセントを中心に」,『言語研究』66, 東京:日本言語学会.
노마[野間秀樹](2001)「한국어 모어화자의 일본어 피치악센트 교육을 위하여」, 梅田博之教授古稀記念論叢刊行委員会編『한일어문학논총』, 서울:태학사.
大江孝男(1976)「大邱方言におけるアクセントの型と長母音」,『言語研究』69, 東京:日本言語学会.
방언연구회(2001)『방언학 사전』, 서울:태학사.
Ramsey, S. Robert(1978;1989) *Accent and Morphology in Korean Dialects*, 서울:탑출판사.
Ramsey, S. Robert(1991)"Proto-Korean and the origin of Korean accent", *Studies in the historical phonology of Asian languages*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
斎藤純男(1997)『日本語音声学入門』, 東京:三省堂.
柴田武(1992)「アクセント核の逆算指定」,『国語学』171, 東京:国語学会.
孫在賢(2005)「韓国語のアクセントタイプと分布」,『日本言語学会第 130 回大会予稿集』, 京都:日本言語学会.
孫在賢(2007a)「韓国慶尚道方言の外来語のアクセント」,『日本言語学会第 134 回大会予稿集』, 京都:日本言語学会.
孫在賢(2007b)「韓国語諸方言アクセントの記述研究」, 東京大学大学院博士学位論文.
宋敏(1999)『韓国語と日本語のあいだ』, 菅野裕臣・野間秀樹・浜之上幸・伊藤英人訳, 東京:草風館.
辻野裕紀(2008)「韓国語大邱方言における名詞のアクセント体系」,『朝鮮学報』209, 天理:朝鮮学会.
쓰지노[辻野裕紀](2010a)「일본어 동경방언과 한국어 대구방언의 음조에 대한 악센트론적 고찰 —악센트체계와 출현빈도, 유형론—」,『일본학보』84, 서울:한국일본학회.
辻野裕紀(2010b)「韓国語大邱方言における名詞のアクセントと分節音の関係」,『朝鮮語研究』4, 大阪:朝鮮語研究会.
宇都木昭(2013)『朝鮮語ソウル方言の韻律構造とイントネーション』, 東京:勉誠出版.
上野善道(1984)「N型アクセントの一般特性について」,『現代方言学の課題2 記述的研究篇』, 東京:明治書院.
Whitman, John(1994)"The Accentuation of Nominal Stems in Proto-Korean", In Kim-Renaud Young-Key (ed.) *Theoretical Issues in Korean Linguistics*, Stanford: CSLI Publications.